英語科研究主題

『気づき』を促す授業の工夫

大矢　裕子　　髙杉　廣張　　大柴　玲子

1　主題設定の理由

今年度も，研究主題を「『気づき』を促す授業の工夫」とし，研究を進めていきたい。

英語は学校教育の中でのみ完成されるものではなく，場合によっては，生涯を通して接していくものである。学習指導要領の解説（第１章 総説 ２ 外国語科改訂の趣旨）には次のように記されている。。

> （前略）併せて，「読むこと」，「書くこと」の指導の充実を図ることにより，「聞くこと」，「話すこと」，「読むこと」及び「書くこと」の四つの領域をバランスよく指導し，高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を培う。

生涯を通して英語を学びつづけていくためには，英語を使う楽しさや世界観が広がる喜びなどを経験することが大事である。そのために私たち教師ができることは，生徒から「ああ，そうか！」「わかった！」「こうすれば良いんだ！」という声を引き出すような授業をつくることである。生徒が試行錯誤し，思考・判断を繰り返す授業をつくることは，生徒を自立した英語学習者として育てていくことにつながるものと信じたい。

生徒は毎時間集中して授業に参加している。ペアやグループでの活動はもちろん，ドリル的な個人作業においても集中を持続させられる生徒が多い。一見すると学習した内容を理解できているのである。しかし実際には，学習したことが定着していないと感じたり，学習したことが上手に活用されていないと感じたりすることが多かった。このような現状を何とかしたいと議論を重ね，授業と授業，知識と知識を有機的につなげることに重点をおき，生徒に「今までに身につけた知識を活用する力（活用できることに気づく力）」をつけさせることを研究することとした。

今までに学んできたことをもとに，「自分の伝えたいことを，より相手に分かりやすく伝えるためにはどうしたら良いのか」を生徒自身が思考していくとき，生徒の中には様々な『気づき』が生まれるはずである。本校英語科では，その『気づき』の繰り返しこそが，生徒の「自ら学ぶ姿勢」を養うものであると考え，『気づき』を促すための教師の役割や，学習課題などについて研究を進めていくこととして本研究主題を設定した。

研究実践と学習指導要領のねらいとのさらなる接点を探りながら，教科内の議論を深めていきたい。また，本研究は生徒に『気づき』を促すことをねらうものであるが，同時に教師自身が授業について深く省察することが求められるものでもあるので，日々の授業実践の積み重ねを大切にしたい。

なお，『気づき』には，あいさつの仕方や生活様式の違いなどを知るといった異文化理解的な『気づき』や，日本語にはないthやｆの発音を知るといった音声的な『気づき』など様々なものがあるが，本校英語科のいう『気づき』とは，

> 書いたり話したりするときに，今までに学んだ知識（語彙・フレーズ，文構造，文章構成，文法事項などに関わる知識）を用いることができると認識すること。

である。

2　研究の目的

本研究の目的は，生徒に『伝える力』をつけさせるために効果的な授業のあり方や指導法を探ることにある。本校英語科では『伝える力』を「身の丈にあった英語を用いて，自分の言いたいこと，考えや気持ち等を話したり，書いたりするなどして伝えることができる力」と定義して研究を進めてきた。（H17～H22年度）

「身の丈にあった英語」それは生徒のもつ「既習の知識」そのものである。よって『伝える力』とは「既習知識を活用する力」であると考える。

既習の知識を用いることが，自分の伝えたいことを表現する上で有効な手段であると生徒自身が気づくことは，英語学習を進める上でとても重要なことだと考える。生徒にそのような『気づき』をもたせるためには，教師が意図的に授業をつくりあげていく必要がある。教師には教材そのものを深く分析し，授業における役割を問い直すことが求められており，本研究では今まで行ってきた授業を生徒の『気づき』という視点から捉え直したい。

３　全体研究との関わり

一昨年度からスタートした全体研究の主題は，「自ら問う力を育む授業の創造　～思考力・判断力・表現力等の育成を目指して～」である。授業において，教師は様々な役割を果たしていて，生徒の学びを支援する。しかし，いずれは教師がつかなくても生徒が自分で課題を解決することができるように育ってもらいたいという願いがある。いわば生徒が「知的に自立する」ことを目指して授業づくりをしていると言える。何か課題に直面したとき，解決に向かうために次にどのようなことを考えればよいのか試行錯誤しながらも考えていけるようになってほしいと願う。その原動力となるのが「問い」をもつことである。問いを生み出す力，すなわち，問う力は，どの教科においても，主体的に学習を進めていく上で，大切な役割を果たすことになる。

（１）生徒につけさせたい力とそれらを育むために生徒にもたせたい問い

英語科でつけさせたい力は何か。それは「既習知識を活用する力」である。単語や連語，慣用表現，文法事項，文(章)構造などに関してのさまざまな知識を得ることにとどまらず，それらを活用して表現できる力をつけさせたい。書いたり，話したりして表現するために，知識を使える状態にまで高めていくには，多くの『気づき』を積み重ねていく必要がある。本校英語科の言う「気づき」は，全体研究で言うところの「問い」をもち，考えた結果として生まれてくるものである。「問い」と『気づき』の繰り返しこそが，生徒の「既習事項を活用する力」を育むことにつながると考える。

生徒にもたせたい「問い」とは，「既習事項を問う」「よさを問う」「相違点を問う」「（他の）方法を問う」ことなどである。「既習事項を問う」ことは当然，上記のような力をつけさせる上で必要ではあるが，その結果生まれてきた『気づき』が適切なものであるとは限らない。見当違いである可能性もあり得る。そのため，生徒は自分が表現したものを分析したり，他のものと比較検討したり，修正したりしなければならない。そこで必要になるのが，他に挙げたような「問い」である。

（２）生徒に問いをもたせる教材のあり方

①『気づき』のもととなるレディネスづくり

レディネスとは，生徒全員が次の学習活動に無理なく入ることができ，所期の目的を達成できる状態を意味する（高橋一幸氏　2003）ものであり，その状態を生徒の内面に作り出す手だてを本校でも模索してきた。表現するための基礎・基本を培うことを目指し，授業の始め５～10分間で，帯プログラムと呼ぶトレーニングや反復練習を継続して行っている。例えば，コミュニケーション活動や自己表現につながる語彙・フレーズ等を耕すためのBINGO，学習事項の復習と文構造の定着を図ることをねらいとしたDictation，音読から自己表現へつなげることを目的としたReading　Marathon，人前で話すことに慣れさせるためのSpeechなどいずれも短時間の活動ではあるが，繰り返し継続することの効果は大きいと考える。

②『気づき』を促す学習課題の設定

生徒は英語の学習を始めてから，日々さまざまな『気づき』を積み重ねていく。言語習得の過程において，意識している，していないに関わらず，それは頻繁におこっているものだと思われる。しかし，私たちは普段日本語を使って生活しているため，学んだことを実際の場面に即した知識，技能として定着させられるような環境がない。周囲がすべて英語を話す人たちであれば，コミュニケーションを繰り返していくうちに，生徒の英語の知識は自然と整理され，使用場面に即したものへと変化していくと思う。しかし，そのような環境がない以上，それに少しでも近づくよう，教師が生徒の『気づき』を促すような課題を設定していく必要がある。

また，そのような課題設定は繰り返し行われる必要がある。その繰り返しの中でさまざまな知識，技能が頭の中に呼び起こされ，表現において活用することのできる知識や技能となっていくものと考える。

（３）生徒に問いをもたせるための教師の役割

生徒に問いをもたせるための教師の役割は，さまざまなものがあると思うが，英語科では，様々な活動を仕組む際には，最終目標・最終の姿（ゴール）とそれに至る道筋を生徒に示すことにしている。

ゴールに至る道筋を示すのは，現在学習していることが次の段階へどのようにつながっていくのかを生徒に理解させることで，毎時のふりかえりを次回に生かすことが可能となり，生徒が自分自身の学びを見取ることができるようにするためである。また，モデルを示されることにより，生徒は最終の姿に対するイメージを持って活動に取り組む

ことが期待できる。

モデルとするのは教科書そのものであったり，教科書をもとに教師がアレンジしたものであったりと，活動内容や課題によって異なるが，提示に際しては次の３点を配慮している。

〇教科書をベースに，生徒の興味関心や知的好奇心を揺さぶるものであること。

〇学習したことを用いれば，課題や活動をクリアできるということに気づかせ，生徒自身が意欲を持って成果を実感しながら取り組めるものであること。

〇モデルの中に自分を置き，自身の経験や考え，思いなどを表出できるものであること。

以上のことに配慮しながら，『気づき』を促すモデルの提示をしていきたい。

（４）生徒の問いをどうみとるか（表現活動・評価）

学んだことは活動が終わると忘れてしまうおそれがある。忘れないにしても，次に同じような場面に出会ったとき，思い出されるまでに時間がかかることは予想できる。頭の中にあるものは，ある程度繰り返し思い出されていなければ，出てこないものだと思う。そこで，生徒が自分の思考・判断の過程や結果などを何らかの形で記録しておくことが重要であると思う。そうすれば，同じような活動の場面に出くわしたとき，それに気づき，過去の学びを生かして活動に取り組むことができる。

学習感想用紙，ふり返りシートなどを活用して，記録を取らせることは，将来，生徒自身に『気づき』を与えることにつながる方法の１つであると考える。しかし，記録を毎時間取り続けることは現実には難しいため，ある単元に絞ったり，何か活動をしたあとなどに限定したりして行っていきたい。記録用紙については１年間同じものを使うなどして，何度も見返せるようにすることで生徒自身に『気づき』を促し，既習事項を生かす習慣をつけさせることが期待できる。

４　研究経過

H17～19　研究主題　『伝える力』を高める授業の工夫

～教科書を発展的・創造的に用いた活動を通して～

本主題で研究をスタートさせてから最初の３年間は，『伝える力』を生徒の実態に合わせて６つに分類し，それぞれの『伝える力』を高めることを目的とした活動・課題の開発に研究の主眼を置いていた。

◇『伝える力』の分類

①聞き手に十分に伝わる声の大きさで音読したり，英語を話したりすることができる力

②スピードや抑揚，間などを大切にして音読したり，話したりすることができる力

③伝えたい内容に見合った身振り・手振りや，実例・実物などの提示を交えて，聞き手を意識した効果的な発表をすることができる力

④教科書の基本文や本文で使われている表現などをモデルとして，既習の学習事項や語句・語彙をできる限り用いて伝えたい内容を話したり書いたりすることができる力

⑤知っている語句や優しい表現を用いて説明したり，言い換えたりすることによって，聞き手や読み手の理解を助けることができる力

⑥文の配列や順序性を吟味して，伝えたい内容を話したり，書いたりすることができる力

しかし，分類したとおりに明確な線引きをすることは難しく，ある『伝える力』が他のすべての『伝える力』のベースになっていたり，それぞれの『伝える力』が相互にかかわり合っていたりすることを強く実感することとなった。

H20～22　研究主題　『伝える力』を高める授業の工夫

～伝えることへのレディネスづくりを意識して～

「『伝える力』を高める指導の工夫」というテーマで平成１７年度から６年間研究を続けた。平成２０年度からは，サブテーマに「伝えることへのレディネスづくりを意識して」を掲げ，課題に向かうために必要となる“心理面でのレディネス”と“知識・技能面のレディネス”の２つを生徒の内面にいかに形成していくかを研究の中心にし，『伝える力』をより豊かなものにしていこうと取り組んだ。

“心理面のレディネス”づくりに関しては，次のようなことを意識して学習過程を考えてきた。

①小さなハードルを一つ一つクリアさせ，自信と意欲を持って次の段階に進むことができるように段階的な指導を取り入れ，練習段階においても上達していることを実感させる。
②個だけではなく，ペアやグループワークを取り入れ，自分だけの考えにとどまらず，仲間との交流をする場面をできるだけ多く用いる。
③場面設定，課題設定，「聞く」「話す」「読む」「書く」の４技能を総合的に活用した学習など様々な学習過程の工夫をする。

これらにより生徒が生き生きと交流する姿が見られた。生徒は，不安のないリラックスした状態で他者の考えや思いを理解し，自分の伝えたいことを伝えようとするなど“心理面でのレディネス”を形成した状態で課題に取り組むことができた。

もう一つの“知識・技能面のレディネス”づくりに関してであるが，これは，主に帯プログラムの活用である。帯プログラムとは，毎時の授業に設定し，トレーニングや反復練習，継続的な活動を通して表現するための基礎・基本を培うことを目指すものである。いずれも意義のある活動であり，ねらいも明確であるが，各教師がそれぞれの持ち味を生かして学年ごとに進めてきていたため，３年間の系統性を持たせるまでには至っていなかった。そこで，各学年の適切な時機に適切な帯プログラム活動を位置づけ，本校英語科が目指す『伝える力』の基礎・基本となるように，また，生徒にとっての“知識・技能面のレディネス”となるように，帯プログラム活動の年間計画を系統立てて整備するに至った。

どちらのレディネスづくりにしても，課題に積極的に取り組む生徒たちの姿を見ることができ，英語に対する興味関心の高まりを感じることができた。しかしながら，書くための準備（語彙，有効な表現，適切な文構造など），発表に向けての準備（練習），心の準備には時間が必要となる。生徒の『伝える力』を高めるためには，十分な時間を上手に確保し，伝える場を生かし，英語を使う喜びを体感できる活動を授業者が仕組むなど，教師側のレディネスも重要であると実感した。

H23～　研究主題　『気づき』を促す授業の工夫

●H23年度

研究主題を「『伝える力』を高める授業の工夫」から上記のように変更した。今までは『伝える力』を分類したり，「伝えることへのレディネスづくり」を研究したりしながら，『伝える力』をより豊かなものにしていこうと取り組んできた。生徒に『伝える力』をつけさせることを目標にしていくという点では研究の方向性は変わらないが，この年度からは，生徒の『気づき』という視点で学習活動や課題のあり方，教師の役割を捉え直すことをねらいとした。

そこで『気づき』を促すものとして，①『気づき』のもととなるレディネスづくり，②『気づき』を促す学習課題の設定，③『気づき』を促すモデルの提示，④『気づき』のふり返りの４つを項目にあげ，研究を進めることとした。

これらのうち，H23年度は『気づき』を促すモデルの提示に焦点をあてて研究を行った。生徒に問いをもたせるきっかけの一つが，ある授業においてはモデルであり，そこから『気づき』を生みだし，自分の表現へとつなげていることがよくわかった。しかし，単にモデルを提示するか否かではなく，『気づき』を促すためにどのようにモデルを提示し，どのようにしてそれに近づけさせるかが重要となる。そのためには，授業者がモデル（目標）をしっかりともち，そこに向けて生徒をどのように導いていくのか，どうやって気づかせるかという道筋をもって授業を行うことが重要である。また，気づかせるためにはいくつかの要素が必要となる。例えば，教師の与える「発問」「考える時間」「ヒントや情報」などである。つまり，ある目標に生徒を導くためにどの教材を扱うのか，どう支援していくのかという教師の役割が鍵となる。研究会では，『気づき』の定義とは何かということも議論にあがった。

英語科として，どのように「問い」を持たせるのか，どのように『気づき』に迫るのか，３年間の見通しをもって研究を進めていくことを再確認した『気づき』についての研究初年度であった。

●H24年度

H24年度はまず，前年度の課題であった『気づき』の定義をしっかり示すことから始めた。本校英語科のいう『気づき』とは，「書いたり話したりするときに，今までに学んだ知識（語彙，文構造，文章構成，文法事項などに関わる知識）を用いることができると認識すること」と定義づけた。そして，前年度に引き続き活動（学習課題）のゴールに至るまでの指導計画や学習過程の見直しを大切にしながら，生徒に『気づき』を促す手立てについてアイデアを出し合い，実践を積み重ね，その有効性を探った。

そこで議論されたのが，全体研究のテーマである「自ら問う（問う力，問い）」と英語科の研究テーマである『気

づき』の関係である。英語科では，『気づき』を促すために有効なのが「問い」を持つことであると捉え，生徒に持たせたい「問い」とは何なのかについても議論を重ね確認し合った。具体的な「問い」はそれぞれの授業で異なるが，「授業を通して身につけた力を生かし，生徒自身が思考判断するもの」である。「問いをもつ」「問う」とは，それまでに身につけた知識を生かし，どうしたらよいのかと思考判断がなされている状態を指す。その問いを生徒にもたせるための教材についてや生徒に問いをもたせるための教師の役割について，授業実践から研究を深めた。課題設定について，モデルについて，学習過程の工夫，学習計画についてなど，どれも英語の授業において必要な要素である。知的好奇心を揺さぶり，思考・判断するような活動や課題を設定することで，生徒は既習の知識を用い，書いたり話したりできることに気づき，表現しようとする姿を見せた。これまでのこれらの研究の成果を生かし，活動（課題）のゴールに至るまでの指導計画や毎時の学習過程の見直しをし，更なる有効性を探っていきたい。

また，生徒自身の『気づき』をより確かなものにしたいという思いから，毎回学んだことを次にどう生かしたいか，友達の発表を聞いてどう思ったかなどを学習感想用紙やふり返りシートなどを活用して記録を取らせ，生徒自身がそれぞれの『気づき』をふり返ることができるように取り組ませてきた。実際の授業での様子とこれらのワークシートから，生徒にどのような問いを，どのようにもたせることができたのかをふり返り，そしてどのように『気づき』につながっていったのかを検証していきたいと考えた。

H23年度からの２年間は，『気づき』を促す手立てについて研究を進めてきた。これまでの研究から，生徒の『気づき』を見取ることでその有効性が見えてくるであろうと思われる。そのため，その見取りに焦点をあてることをH25年度の課題とした。

５　研究内容

（１）これまでの研究の成果と課題をふまえ，生徒に『気づき』を促す手だてや，活動・課題のあり方を探り，授業実践を通してその有効性を探る。

（２）学習段階に応じた指導計画や毎時の学習過程の工夫が，生徒の『気づき』にどのような効果を及ぼしたのかを検証する。

（３）発問やフィードバックなど授業における教師の働きかけが，生徒の『気づき』とどのようにかかわるのかを検証する。

６　今年度の研究について

今年度は，生徒の『気づき』を見取ることを中心に研究を進めていく。生徒の内面で起こっている『気づき』を見取るには，それを可視化しなければならない。今年度は可視化する方策を探っていきたい。

●可視化させることの利点は？

①生徒自身が既習事項を整理し，それらを活用する方法を思考することができる。

②教師が生徒の変容を見取るための助けとすることができる。

※なぜ生徒の作品に変容が見られたのか。つまり，どのような『気づき』が生徒の変容を促したのか。

●具体的な見取りの方法

①生徒が学んできたこと（教師が指導してきたこと）を整理・分類し，既習事項を目に見える形にする。

→　既習事項の可視化（図１参照）

②英文原稿づくりなどにおいて，どんな既習知識を取り入れ，活用したのかを生徒に記録させる。また，そうした目的や理由なども文章化させる。

→　生徒自身の思考・判断の可視化（図２参照）

７　研究のまとめ

英語科では，これまでの３年間，今まで行ってきた授業を生徒の『気づき』という視点から捉え直し，効果的な授業のあり方や指導法を探ってきた。生徒が自分の伝えたいことを表現するためには「問い」をもつことや「既習事項を活用する力」が必要となる。また，自ら学習する生徒を育成するためには，思考・判断を繰り返す授業，つまり「問い」と『気づき』の繰り返しが必要であると考えた。これまでの研究から見えてきたことが，以下のようなものである。

（１）生徒の「問い」と『気づき』を生み出す教師の手だて

①帯プログラム

既習知識を活用するためには，それらをスムーズに引き出せる状態にしておくことが必要である。そこで，毎回授業の最初の時間を使って，文法事項などを復習させた。すると，どのような既習事項を使ったらよいのかを自ら問うようになり，その中から適切な表現を自分で選び，より読み手にわかりやすくまとまった文章を書くことができるようになった。

②ペア（グループ）ワーク

生徒に「問い」をもたせるためには，一度書いた文章に仲間から指摘（アドバイス）や質問をしてもらうことが有効であるとわかった。それは，読み手から自分の文章を変えていく材料やアイデアを得られるからだと考える。また，読み手にとっても，仲間の文章を読むことは「問い」をもつ上で有効であると考える。

③モデル文の提示

教師が提示するモデル文については，提示すべきかどうか議論を重ねてきた。その結果，題材や指導方法，生徒の状況により，教師が使い分けることが重要であると考える。提示したモデル文を生徒が真似することにより，生徒は「問い」をもつことができなくなる恐れがある。ときには，あえて完全ではないモデルを提示したり，モデル文を生徒と作ったりすることも有効であると思われる。

（２）生徒の変容の見とり

自分自身の文章の見直しや，他人からの指摘によって気がついたことを，どう活用して修正したのかがわかるようにワークシートに記述させた。生徒に内言を自分の言葉で説明させる機会を設けることで，生徒の「問い」や『気づき』を本人以外にもわかるようにした。そうすることで，それぞれの生徒がお互いの『気づき』を理解することもでき，教師はワークシートを見返して，生徒の「問い」や『気づき』を見とることもできると考えた。

今年度は，ワークシートを中心に見とりの方法を模索してきたが，生徒の内言を１枚の紙に書かせることは，単元の最初から最後までの生徒の変容を見とるうえで効果的であった。

（３）課題

既習知識をマッピングし，整理してまとめることは『気づき』を起こさせる上で有効だろう。また，ワークシートを用いることで『気づき』があったであろうことは見えてきた。しかし，「問い」や『気づき』は学習過程で生まれるものだと思う。そこで，「問い」や『気づき』が自然と生まれてくるような課題の設定や指導の工夫が求められる。

プロジェクト型授業を行った場合，指導の中で新たな知識を与え，最後にその知識を活用できたかどうかを見とろうとすることが多い。それは短期的な『気づき』であり，長期的に見た場合，同じように『気づき』がおこるのかはさらなる研究が必要である。またその場合，３年間を系統立てた取り組みが不可欠となる。

情報のやりとりが多いほど「問い」や『気づき』は増えていくのではないだろうか。これまでの研究から，書く活動は記録を残しやすく，見とりにつなげやすいことが分かった。しかし書く活動は発信が主になるため，情報のやりとりという点では話す活動が望ましい。話す活動は生徒に達成感を与えやすいが，見とりは難しくなる。そこで，今後はＩＴ機器の活用など，既存の枠組みを超えた工夫が求められる。

以上の課題をふまえ，さらに生徒に伝える力をつけさせるための効果的な授業のあり方や指導法を探っていきたい。

７　参考文献等

〇すぐれた英語授業実践　　樋口忠彦・緑川日出子・高橋一幸（大修館書店）1999

〇山梨大学教育人間科学部附属中学校平成23年度，24年度研究紀要

〇文部科学省「中学校学習指導要領解説　外国語編」　平成20年９月

図１　既習知識Map
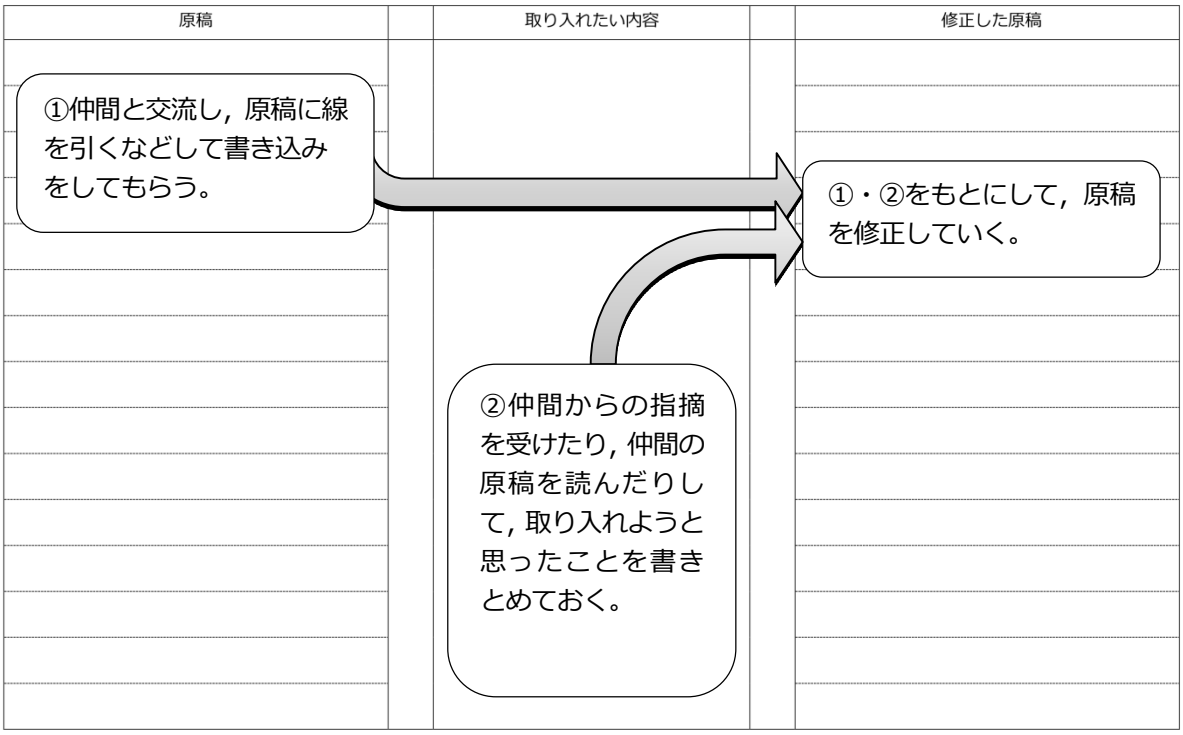
図２　ポートフォリオ